
白い闇

暁煌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い闇

【Nコード】

N4293D

【作者名】

暁煌

【あらすじ】

T・M・Revolution/白い闇の歌詞を基に作者が想像したサイドストーリー的な作品です。（これは作者が持つイメージのため捉え方により嫌悪感を抱かれる場合がありますが、あくまで一例として捉えください。また本作品はT・M・Revolutionの作品を否定するなどの意味を持たず、尊敬心を持って製作しました。）

1) 始まり(前書き)

本作品はT・M・Revolution/白い闇を題に作者が心に描いた背景です。

1) 始まり

何でこうなったのか・・・

嘆くことすら忘れて震えている。

誰かを殺めることも

また傷付けることも

まったく考えたこともない。

夢中で携帯のリダイアル機能を呼び出す。

「もしもし・・・どうしよう・・・大変なことになって・・・
．助けて・・・」

僕が助けを求めたのは最愛の人。
いつか教会で永遠を誓うはずの人。

雨のやまない部屋の窓から見える景色に、ガラでもなく昔泣いた映画のワンシーンを浮かべた。

主人公が友人を殺めてしまい罪悪感と悔いに悩んだ挙げ句、自ら「死」を選ぶ。

「今の僕とそっくりにも程があるな・・・」
自嘲気味に、そして力なく呟いて。

程なく、インターホンが来客を告げる。
彼女だった。

開口一番。

「ごめんなさい。」

一瞬の隙間。

僕は彼女の言葉の意味を考えた。

尚も続く。

「本当はうすうす分かったた。

あなた．．．昨日の夜から変だった。」

昨日はデートだった。

それに関わらず毎夜のメールを欠かしたことなくあった。

．．．昨日を除いて。

「心配になって、今朝方あなたの友達に聞いてみた。

あなたに何かあったみたいって言ってた。」

淡々と続けながら、窓の外を眺める僕に彼女は謝った。

2) 最後の約束

「．．．旅行に行かないか？」

突然の話題転換は普段の通りだが、今日は違う。

「高跳び．．．？」

彼女は刑事物ドラマに出てきそうな言葉を返した。

少しの間を置いて、僕は答えた。

「違うよ。ただ罪を償う迄に君と最後の．．．そう、最後の思い出を作りたいだけだ。」

旅行から帰ったら出頭するよ。」

僕らはその日の内に電車に乗った。

学生時代に初めて行った日帰り旅行と、

同じ行き先。

同じ二人と、

違う空気で。

それは隣の県の小さな海浜。

冬を迎えたこの時季に誰もいない海。

片道数時間を掛けて到着した。

この間、会話は無い。

空が紫に変わると静かに彼女の手を手繰り寄せた。

「寒いね。」

「うん。」

もう決めたんだ。
文字通りの決意を。

「先に帰っててくれないか。
それと僕の机の一番上の引き出しを見てくれ。今まで言えなかった
ことがある。それを書いた封筒を読んで。」

彼女に助けを求める電話の直前に書いたんだ。
今まで誰にも話してなかった秘密と．．．それに対する謝罪。

彼女を見送ると僕はまた海浜に足を運んだ。
彼女の僕に向けられた最後の笑顔を胸に抱いて。

夜が深まったら石を抱えて海に沈む。

彼女は知ってか知らずか何も聞かないまま、街へと帰った。

そして僕だけは・・・

雪の降りだした海へ向かう。

誰に知られるでもなく。

3) 白い闇

僕は彼女を見送った駅まで、手を繋いでいた。
駅に着くと然り気無く外して、微笑んだ。
永遠の別れを意味したように。

独りになって思い出すのは、やはりここで数年に一度の流星群に願いを掛けた冬の日。

寄り添いながら、僕だけは今日
「永久の別れ」を予感していた。

真冬の海は雪の華を誘っている。

最後の一秒まで彼女の記憶が消えぬよう。君と描いた思い出を、やがて夜闇に融けゆく雪に重ねて。華やいだ僕の時間は、失われてゆく。雪のように儚く。

街へ戻ると真っ先に彼の自宅へ向かった。
そして彼の最後の約束・・・白い封筒を見つける。
そこには彼の決意が文字として残っていた。

「・・・違う・・・私のせいなのに・・・」
震えながら涙が溢れた。

予感はしてた。覚悟もしてた。
止めることも、出来なかった。
引き留めるなんて無理だった。

もう遅い。

今から海浜まで行こうとも、日付が変わる。間に合わない。
それでも．．．彼女は．．．電車に飛び乗った。

彼の決意が分かった。そんな気がしていたから。言葉にしなくても、私の心が彼に言ってしまう気がして、顔を見つめることが出来なかった。

「いけないで」と言えたならどんなに．．．

代わりに誤魔化して

「寒いね」だなんて．．．馬鹿みたい。
それが最後の会話になるなんて．．．

もう夜を向かえて雪と星が空を染めている。
せめて二人で逝きたい！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4293d/>

白い闇

2010年10月10日04時51分発行